

実践報告4

ノンバーバルスキルの評価

愛知県立春日井東高等学校 教諭 佐々木 誠

愛知県立丹羽高等学校 教諭 村瀬 美樹

愛知県立阿久比高等学校 教諭 田中 恵美

1 はじめに

平成30年告示の学習指導要領では、コミュニケーションを図る資質・能力を育成することが大きな目標となっている。この目標の達成のために、高等学校の英語の授業ではさまざまな言語活動を通じた指導が進められている。文部科学省が令和5年12月1日を基準日として実施した「令和5年度公立高等学校における英語教育実施状況調査」によると、調査対象の全国の高等学校の普通科2,205校でのべ30,127回のスピーキングテストが実施されている。つまり、平均すると1校あたり1年で13.7回のスピーキングテストが実施されていることとなる。

スピーキングテストを実施する際、「話すこと[発表]」「話すこと[やり取り]」のどちらを評価する場合であっても、話している内容とともにノンバーバルスキルも評価していると考えられる。本研究においてノンバーバルスキルとは、「コミュニケーションをより円滑に行うために、話し手が用いる文字情報以外のスキル」と定義した。具体的には、誰に向かって話しているかをより分かりやすくするためのアイコンタクトや、場面に応じた声の大きさ、伝えたいことを明確にするための声の抑揚、会話を発展させるための相づちや、ジェスチャーなどが該当する。

しかし、これらノンバーバルスキルは、どの観点で指導と評価をすべきだろうか。平成30年告示の高等学校学習指導要領164ページ「2 内容」〔知識及び技能〕(1)「ア 音声」には「(ア) 語や句、文における強勢 (イ) 文におけるイントネーション」とある。また、高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説外国語編英語編14、15ページに「『思考力、判断力、表現力等』の育成のためには、外国語を実際に使用することが不可欠」であり、「コミュニケーションを行う目的や場面、状況などを踏まえて理解したり、話題や内容に応じた語彙や表現、論理性などに留意して表現したり伝え合ったりすることを示している」と述べられている。このように、音声や文字情報に関する記述はあるが、ノンバーバルスキルについての記述は見られない。

外国語科（英語科）における「学びに向かう力、人間性等」の目標について、学習指導要領には「外国語（英語）の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的、自律的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う」とある。ここでは、ノンバーバルスキルは相手に自分の意図を伝えようとする配慮として捉え、「主体的に学習に取り組む態度」として評価する可能性を以下の二つの実践を通して探った。

- ①パフォーマンステストに向けた「自らの学びを調整しようとする側面」と「粘り強い取組を行おうとする側面」の二つの側面による評価
- ②「聞き手への配慮」「主体的、自律的に外国語を用いる」ことによる評価

2 実践例 1 二つの側面による評価

国立教育政策研究所の『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料（高等学校 外国語）』では、「主体的に学習に取り組む態度」の評価のイメージとして「①知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行おうとする側面と、②①の粘り強い取組を行う中で、自らの学習を調整しようとする側面、という二つの側面から評価することが求められる」と記載されている。つまり、スピーキングテストに向き合う中で「自らの学びを調整しようとする側面」と「粘り強い取組を行おうとする側面」があれば、「主体的に学習に取り組む態度」の評価とすることができると考えた。この考え方に基づき行った実践は以下のとおりである。

(1) 実施科目

「ディベート・ディスカッションⅠ」

(2) パフォーマンステスト

○領域

「話すこと [やり取り]」

○実施方法

1対1のミニディベート形式で行う。ペアになり、与えられたテーマについて賛成または反対の立場で意見を述べ合う。試験時間は各ペア6分間とする。ペアの決定及びどちらの立場で論じるのかは当日くじで決定する。

論題：“Japan should accept more refugees.”

テストの流れ：

①賛成派の立論（1分）→②反対派の立論（1分）→③準備時間（1分）
→④反論（2分）→⑤賛成派のまとめ（30秒）→⑥反対派のまとめ（30秒）

○評価基準

「思考・判断・表現」については、二つの条件を両方とも満たしていればb（おおむね満足できる）としている。

	「思考・判断・表現」	「主体的に学習に取り組む態度」
条件	①賛成または反対の立場としてふさわしい内容の発言をしている。 ②相手の発言を注意深く聞きながら理解し、その反論を考えて伝えている。	聞き手に伝わるよう、ジェスチャー、アイコンタクト、声の大きさや抑揚などのノンバーバルスキルを効果的に使っている。
a	条件①②を十分に満たしている。	上記条件を十分に満たしている。
b	条件①②を満たしている。	上記条件を概ね満たしているが、不自然な個所があり、聞き手への配慮に欠ける場面が見られる。
c	「b」を満たしていない。	「b」を満たしていない。

「十分満足できる」状況と判断されるもの：a

「おおむね満足できる」状況と判断されるもの：b

「努力を要する」状況と判断されるもの：c

(3) パフォーマンステストまでの指導

ア 生徒個人の目標設定

単元の目標に沿ったクラス全体の共通目標を共有するだけでなく、内容及びデリバリー両方において、生徒一人一人に達成したい努力目標を設定するよう指導した。特にデリバリーにおいてはジェスチャーやアイコンタクト、声の大きさや抑揚などのノンバーバルスキルを含めることを促した。

イ 立論・反論の練習と相互評価、中間自己評価

パフォーマンステスト当日まで、異なる論題で2回練習を行った。4人グループで一人は賛成の立場で発言、一人は反対の立場で発言、一人は論理性など発言内容をジャッジ、そしてもう一人は発言者のデリバリーをジャッジ、と役割を明確にして練習を行った。また、同じ論題で役割を変え、繰り返し練習を行った。これは、視点を明確にした上で他者を評価することにより、どのような内容やデリバリーがより伝わりやすいのかを客観的に見る力を育てることができると考えたからである。それぞれの活動の後には仲間との相互評価を行うことで新たな気づきを得るきっかけづくりを行った。また、新たな論題で練習を行う前やパフォーマンステスト前には中間自己評価を実施し、自らの活動を振り返る機会を設けた。

(4) 考察

実践中は相互評価や中間自己評価を通して改善点を見つけるなどの取組が見られた。今回の実践で扱うノンバーバルスキルについても、「相手に配慮したジェスチャーとは何か」という疑問が挙がった際には、グループやクラス全体で意見を出し合い、相手とよりよいコミュニケーションを図るための方策について考えた。さらに、最初に設定した目標が適切であったか、取組状況に問題点はなかったかを中間自己評価の際に見直すことで、自らの学習を調整しようとする姿が見られた。中には、必要に応じて目標を再設定する生徒もいた。

「主体的に学習に取り組む態度」は、「自らの学びを調整しようとする側面」と「粘り強い取組を行おうとする側面」から評価することが求められているが、ノンバーバルスキルにおいても、パフォーマンステストの場で粘り強い取組や学習調整の成果が見て取れる。したがって、パフォーマンステスト当日における生徒のデリバリーを「主体的に学習に取り組む態度」の観点で評価することができると言える。

3 実践例2 「聞き手への配慮」「主体的、自律的に外国語を用いる」ことによる評価

『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料(高等学校 外国語)』36ページには、「主体的に学習に取り組む態度」は、外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的、自律的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとしている状況の評価する」ものであると示されている。「聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮」とは、高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説16、17ページには、「相手の理解を確かめながら話したり、相手が言ったことを共感的に受け止め」たりすることが挙げられている。つまり、スピーキングテストにおいて英語を話す中で、聞き手に配慮したり、主体的、自律的に外国語を用いたりする場面があれば、「主体的に学習に取り組む態度」の評価とすることができると考えた。この考え方にに基づき以下の実践を行った。

(1) 実施科目

「英語コミュニケーションⅠ」

(2) パフォーマンステスト

○領域

「話すこと〔発表〕」

○単元目標

年代別、国別の幸せについての考え方を参考に、幸せとは何かを英語で説明できる。

○評価基準

	「主体的に学習に取り組む態度」
a	幸せとは何かを伝えるために、自然にアイコンタクトを用いて相手の理解度をうかがい、話すスピードやジェスチャー、間をとるなどして相手の理解を促す配慮をしている。
b	幸せとは何かを伝えるために、アイコンタクトを用いて相手の理解度をうかがい、話すスピードやジェスチャー、間をとるなどして相手の理解を促す配慮をしている。
c	「b」を満たさない。

「十分満足できる」状況と判断されるもの：a

「おおむね満足できる」状況と判断されるもの：b

「努力を要する」状況と判断されるもの：c

○ノンバーバルスキルの評価

アイコンタクトについて	
ほぼずっと顔を上げ、聞き手に向かって話をしている。	4
おおむね顔を上げ、聞き手に向かって話をしている。	2
顔を上げ、聞き手に向かって話をしている時間が短い。	1
ほとんど顔を上げていない。	0
話し方について	
話すスピードや声の大きさ・トーンが聞き手にとってスピーチを聞きやすいものになっている。	4
話すスピードや声の大きさ・トーンについて、聞き手にとってスピーチの聞き取りにやや支障がある。	2
話すスピードや声の大きさ・トーンについて、聞き手にとってスピーチの聞き取りに大きな支障がある。	1
ジェスチャーについて	
ジェスチャーが効果的に使用されている。	2
ジェスチャーが使用されている。	1
ジェスチャーの使用が非常に乏しい。	0

上記の評価基準を基に、適切にアイコンタクトを用いて相手の理解度を確認しながら、話すスピードやジェスチャー、間をとるなどして相手の理解を促す配慮をしているかを評価した。

(3) 考察

パフォーマンステストの様子について、生徒のアイコンタクトやジェスチャーの多くは、指を使って数字を表すものから、胸に手を当てて幸せな気持ちを表現するものまで多岐にわたり、どれも聞き手への配慮として行われていると感じた。つまり、ノンバーバルスキルを他者への配慮として考え、「主体的に学習に取り組む態度」として評価することは適切であったと考えられる。

一方で課題も明らかになった。本実践では、「顔を上げている」「ジェスチャーを使用している」等を評価規準としたが、原稿を読み上げた後に一瞬だけ顔を上げるようなアイコンタクトなど、中には聞き手への配慮となっていないジェスチャーが見受けられた。一生懸命にジェスチャーを取り入れよ

うとはしているが、ノンバーバルスキルを「他者への配慮」として捉え、それを「主体的に学習に取り組む態度」として評価するという前提に立つ本実践においては、これを評価することは適切でないと言える。

ノンバーバルスキルにおける「他者への配慮」を正確に評価するためには、評価基準の工夫が必要である。例えば、ジェスチャーの回数やアイコンタクトの頻度のみを評価するのではなく、全体を見渡すようなアイコンタクトや、感情を表現するジェスチャーのような質的な側面を評価することが考えられる。これにより、「聞き手への配慮」をしながら「コミュニケーションを図ろうとしている」かどうかを、より適切に評価することができると考える。

4 まとめ

今回の実践では①と②の二つに分けて行ったが、結果としてどちらの実践にも、①と②の両方の要素が含まれていたことが分かった。①の、パフォーマンステストに向けた「自らの学びを調整しようとする側面」と「粘り強い取組を行おうとする側面」の二つの側面に焦点を当てた実践でも、②にある「聞き手への配慮」「主体的、自律的に外国語を用いる」生徒の姿を見ることができた。また、②の、「聞き手への配慮」「主体的、自律的に外国語を用いる」ことに焦点を当てた実践でも、パフォーマンステストに向けた「自らの学びを調整しようとする側面」と「粘り強い取組を行おうとする側面」の二つの側面を見ることができた。このことから、ノンバーバルスキルは「主体的に学習に取り組む態度」として評価することができると言える。

5 参考文献

- ・『高等学校学習指導要領』、文部科学省、2018 年
- ・『高等学校学習指導要領解説』、文部科学省、2018 年
- ・『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料（高等学校 外国語）』、国立教育政策研究所、2021 年
- ・「令和 5 年度公立高等学校における英語教育実施状況調査」、文部科学省、2024 年
https://www.mext.go.jp/content/20240527-mxt_kyoiku01-000035833_4.pdf